

## 看護学科学生の海外研修の意義と課題 — 2012年度海外研修参加学生の学びから —

花井 節子, 山下 美穂, 福岡 真理

### 要 旨

2012年度に実施したロンドンにおける海外研修について、海外研修方向性決定までの経過と実施した研修内容を振り返りつつ、参加学生のレポートから海外研修の意義と課題を明らかにしたいと研究に取り組んだ。

海外研修前の学生全体のニーズは大学での授業・実習への参加という主体的な研修より、病院見学などを主体とした“見て感じる”研修だということがうかがえ、その方向で進めていった。研修後の参加学生のレポートから、次のような意義と課題が明確となった。1. 看護の先駆者であるF.Nightingaleについて概念的な認識から、研修を通して具体的な像が広がり存在を実感する。さらに学習したことの意味を考える表象的な認識に変化し関心が増す。2. 個々の看護観が医療施設の見学や参加を通してより明確になる。3. 日本と異なる医療保険制度やホスピスのあり方について違いを明確にし、対象の位置から意味をとらえ自己の考えを確認する。保健医療に関して国際的視野が広がる。4. 看護の本質である「患者中心の看護」を確認している。5. 世界遺産や博物館、美術館見学を通して歴史や文化の豊かさ、寄付文化など、異文化理解につながった。教育的課題として1.4年次の卒業直前の研修旅行であったために、研修成果は卒業後の職業生活にはいかされると推測されるが確認はできない。その成果を在学中の自己の学習に反映したり後輩達へつなげることができない。これらを考えると4年次以外の時期の検討や複数学年にまたがる研修も検討してよいのではないかと考える。2. 研修前に期待していた地域の人との交流がなかった。そのために会話に対するストレスの記載はなかったが「もう少し英語が話せるようになりたい」という意見もあり研修内容のさらなる検討も必要である。

キーワード：海外研修，看護学生，意義，課題，ロンドン

### I. 序 論

経済・社会のグローバル化が加速する中で、世界を舞台に活躍できる人材の育成が急務となっている。看護基礎教育の教育内容の中で「国際」という文言が使われるようになったのは1997年の指定規則の改正からである。基礎分野「人間と生活，社会の理解」という中に「国際化及び情報化へ対応しうる能力を養えるような内容を含むことが望ましい」<sup>1)</sup>と明示され、専門分野の中では「国際社会において、広い視野に基づき看護師として諸外国との協力を考える内容とする」<sup>1)</sup>と明示されていた。さらに2009年の改正では「国際化及び情報化へ対応しうる能力を養えるような内容を含むものとする」<sup>2)</sup>と強化されていた。この「国際化に対応しうる能力」とは何をさすのであろうか。

世界で活躍する人材の育成にとどまらず、日本国内においても、異なる文化もつ人たちの環境や生

活を理解することが看護において欠かせない状況になってきている。つまり、異文化をもつ人を理解することはヒューマンケアの基本的能力を育成するために重要だということ、看護を国際的な視点に立って考えられるような素地をもてるようにすることが求められていると考える。

本学科では、国際人間学部と短期留学生に関する大学間協定を取り交わしているアメリカ Viterbo 大学と、平成14年から相互に看護学科の学生が各大学で研修を行っていた。参加人数は本学の規定と先方の受け入れ可能人数により10名と限定されていたが、現在までに3回実施できている。しかし近年参加者を募集しても10名に達しない現状があり、海外研修を希望する学生が諦めざるを得ない状況も生じていた。要因としては、経済不況に伴う費用の問題とともに、一般大学生の調査結果にもあるように「海外への興味の薄さや語学に対する不安から留学への抵抗感が増している」<sup>3)</sup>という現状なども考えられる。しかし、本学科の教育目標に「自己啓発

能力と研究的態度を身につけ、社会の動向に関心を持ち、看護の専門性を発展させる能力を養う」と掲げ、卒業時の実践能力には「異文化の理解につとめ、変化する国内外の社会の動向に関心を持ち、社会のニーズに対応する姿勢を身につける」と明示し「異文化探検」という科目を位置づけている。授業のねらいとしては「人間は文化的背景をもちながら生活していることの理解を深めると共に、各人のもつ文化や価値感の共通点と違いを受容し、お互いの文化を尊重してコミュニケーションする能力を養う。また、国際的な視点から看護を捉える機会とする」としている。

以上から、「看護」や「人間」について考えを深められ、学生が参加したくなる研修を是非実現したいと考え、多くの課題をクリアしていった。今回、海外研修方向性決定までの経過と実施した研修内容を振り返りつつ、学生のレポートから学びを抽出した。そこから研修の意義と課題を明らかにしたい。

## II. 研究目的

海外研修方向性決定までの経過と実施した研修内容を振り返りつつ、参加学生のレポートから、海外研修の意義と課題を明らかにする。

## III. 研修概要

### 1. 研修方向決定までの経過

- 1) 学生の海外研修に関するニーズを知る：平成23年4月 Viterbo 大学との交渉を進めつつ、看護学科4年生に募集を行ったが10名に達しない。他学科からの共同開催の申し入れもあり、それも視野に入れながら、学生のニーズを調査した。方法は次の通りである。対象は2～4年生、調査方法は質問紙による調査、調査項目は「海外研修への興味」

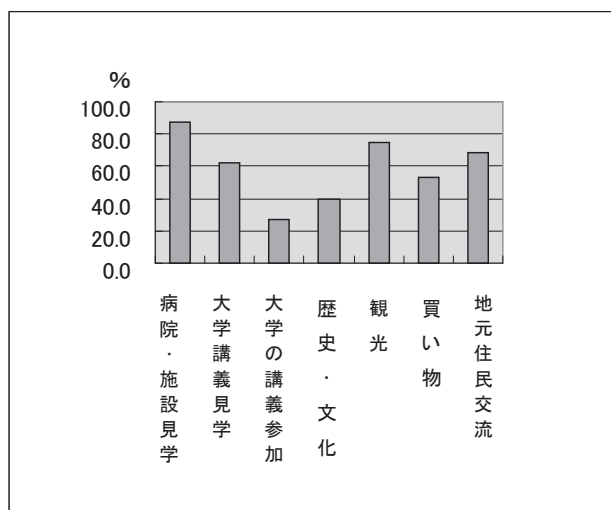


図1. 希望する研修内容

〔希望する研修内容〕〔研修場所〕〔海外研修への不安〕である。

- 2) 調査結果と決定：87.9%の学生が海外研修に興味を持っていた。研修内容については複数回答で、病院見学:87.1%、観光:75.0%、地元の住民との交流:68.6%であった。希望する研修場所はイギリス:36.4%、アメリカ:35.7%が多かった。時期は全学年の半数の学生が国家試験終了後で、期間は10日間、費用は30万円程度が90%を占めていた。海外研修に対する不安は費用:79.3%、語学力:52.9%が高く、4年生は就職活動への不安:63.8%国家試験への影響に対する不安:59.6%と他学年に比べ高かった。(図1・2参照)

上記の結果から、学生の海外研修に対するニーズはViterbo 大学での研修、つまり大学での講義・実習への参加という主体的な研修より、病院見学などを主体とした“見て感じる”研修だということがうかがえた。また参加に対する不安は「費用」が最も多いが、研修場所は渡航費の安い近隣の国々への希望者は少なかった。これらから、共同開催の申し入れのあった他学科と研修場所を一緒にすることで人数を確保し、かつ研修は合同で行うもので、看護学科単独で行うものと内容を工夫することで、学生のニーズを担保するという概要が決定し準備を始めた。

### 2. 研修概要

- 1) 研修目的：(1) ナイチンゲールの足跡をたどり、彼女の人間観・健康観・看護観が育まれた社会的、文化的、歴史的背景を学び、その意味を実感できる。(2) イギリスの医療・看護事情を知り、より広い視野で看護を捉え、変化する国内外の社会の動向に関心をもてるようになる。(3) 異文化探検を通して、

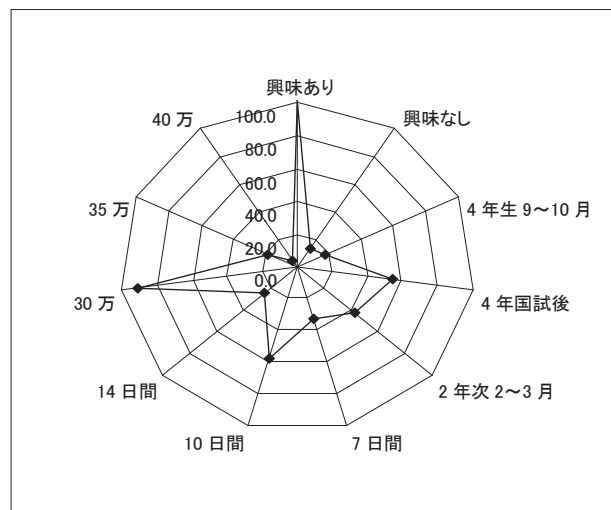


図2. 海外研修への興味・時期・期間・費用

様々な文化背景にある対象を理解しようとする姿勢が養われる。

2) 研修期間:平成 24 年 2 月 25 日(日)～3 月 8 日(土)

3) 研修先: イギリス (イングランド) ロンドン

(1) 医療施設見学: ホスピス 小児病院 退役軍人の居住施設

(2) 観光 (博物館, 美術館, ウィンザー城, ストーンヘンジ, パース観劇他)

4) 研修参加者: 看護学科 4 年生 6 名 ことばと文化学科 8 名

5) 引率教員: ことばと文化学科教員 2 名 (British) 看護学科教員 1 名

6) 研修内容

(1) ナイチンゲールに関連する史跡・博物館

① F.Nightingale's grave (F.N. とする) 見学 (St.Margaret's Church)

ロンドン郊外ハンプシャー州にある墓を見学。大型バス 1 台がようやく通る未舗装の道路脇の小さな教会。周囲には一般の方の墓。ひときわ目立つナイチンゲール家の墓。墓の 1 面に F.N. とだけ書かれ、側面には父親と母親、姉の経歴が書かれていた。教会にはクリミア戦争で使われた銃弾で作成されたクロスや写真等が置かれていた。(写真 1)

② Nightingale Museum: ロンドンのテムズ川沿いにある



写真 1-1. St.Margaret's Church



写真 1-2. 教会内にあるクリミアのクロス

るセント・トーマス病院に併設されている博物館を見学する。看護の歴史を説明している写真, 看護に関連する備品, ユニフォーム等の遺品などが納められていた。(写真 2)

(2) Dorothy House Hospice 訪問

1976 年在宅ケア中心のホスピスとしてバースに設立された施設を訪問。田園風景が広がる住宅が点在している地域にあった。広い敷地に平屋の建物。玄関もこじんまり。病院という感じはしない。スタッフが集まり本日のデイケアに来られる利用者についてカンファランスに参加。利用者の病気や現在の状



写真 1-3. F.Nightingale's grave



写真 2-1. テムズ川沿いにあるセント・トーマス病院



写真 2-2. Nightingale Museum( セント・トーマス病院内 )



態、苦痛などの他、関わりや本日の予定などが説明され、その後7～8名の利用者が来られた。それぞれ自己紹介していただき温かく迎えてくださるのを感じる。雑談のあとティタイム、レクリエーション(陶板製作)をスタッフのサポートを受けながらされる。学生は利用者の側でそれを見守る。学生3名ずつ2日に分けて訪問。施設の見学や看護師から思いを聴かせていただく。緊張はしていたが暖かな空気、なごやかな雰囲気、おもてなしをされていることを強く感じる。(写真3)

**(3)Great Ormond Street Children's Hospital :** ロンドンで最も大きな小児病院を見学。教育担当ナースから説明を受ける。施設の歴史、F.N. と同時代に建設された小児専門病院で、ほとんどの小児の病気に対応できる施設で全世界から治療に訪れ、今は中東地域の子どもたちが多く、イギリスの保険制度(NHS)や多くの寄付金で運営されていること、研究施設も併設され年々拡張していること等の説明を受ける。また看護教育制度は3年間の大学教育で入学時から専門領域を決めること、ほとんどの学生は働きながら学び、現在150名が学生の看護師で職員3,000名中1,000名は看護師であること多くの専門看護師がい

ること等を詳しく説明を受ける。一つの病棟を見学、プレイルームや診療の様子を見学できた。併設の図書館で病院の歴史やF.N. から院長宛ての直筆の手紙があり、彼女が看護教育の入試制度や未経験者の研修など看護教育制度に心をくわいていたことが理解できた。(写真4)

#### (4)Chelsea Pensioners' Hospital

退役軍人の居住施設を見学する。がロンドン市内からさほど遠くない、テムズ川が大きく広がる河口近く、川沿いにある施設であった。広い敷地内は木々や塀で囲まれ、その中に退役軍人の居住施設や資料館、教会などがあった。資料館の中でこれまでの歴史や部屋の模型などを見ることができた。身寄りのない退役軍人の生活を国が保障するという形で施設が作られたことを知ることができた。(写真5)

**5) 観光 :** エリザベス女王の居城である Windsor Castle や1440年ヘンリー6世が設立した有名私立校 Eton College, ソールズベリー大聖堂, 世界遺産の5000年以上前の石の建造物 Stone Henge や古代ローマ時代の浴場跡のある Bath を見学する。Pit t Rivers Museum や Ashmolean Museum, 大英博物館では見ごたえのある展示物で歴史と文化の豊かさを知る。



写真 3-1. Dorothy House Hospice のある地域



写真 4-1. Great Ormond Street Children's Hospital



写真 3-2. Dorothy House Hospice



写真 4-2. Great Ormond Street Children's Hospital



写真 5. ChelseaPensioners' Hospital

#### IV. 研究方法

1. 研究対象：研修参加学生が研修前に提出した事前レポートおよび研修後に参加学生6名が提出した記録
2. 研究期間：平成25年3月15日～平成26年1月31日
3. 研究方法

- 1) 研修学生が研修前に提出した事前レポートから、学生の期待や不安、事前準備等について明確にする。
- 2) 学生が海外研修後に提出したレポートを精読し、記述内容を質的帰納的に分析し認識の特徴を取り出す。
- 3) 1)の研修前の学生の期待と3)の内容分析から、今回の海外研修の意義と課題を明らかにする。

#### 4. 倫理的配慮

事前課題レポート、事後の課題レポート、写真について、研究目的や方法期間などを説明するとともに、研究参加や協力への自由意志および拒否する権利、プライバシーおよび個人情報の保護についても文書に明示して説明し承諾書提出をもって同意とみなした。

#### 5. 用語の定義

認識とは：頭脳活動と心理活動を併せもつ脳細胞の機能（はたらき）<sup>4)</sup>

#### V. 研究結果

##### 1. 研修参加学生の研修前に提出したレポート結果 (N=7名)

- 1) 参加人数や期間についてはほとんどの学生が妥当と記載していた。
- 2) 時期については妥当と答えた学生が4名、他の時期が3名で理由は課題が多い、気候の良い春休みや夏休みが良いという回答であった。
- 3) 海外旅行の経験のある学生が3名いた。
- 4) 海外研修への不安：海外旅行の経験のない学生4

名が語学に対する不安をあげており、寒さや食事に対する不安を4名の学生があげていた。不安に対する対策として、全員の学生が関連する本を読んだりインターネットで情報を検索すると答えていた。5名の学生は他学科で開講されている海外研修者用に設定されている科目（生活英語Ⅱa）を受講するとあげている。実際に後期15コマのすべて英語の講義を受け、現地の地理や研修先の特徴、使用されている通貨等を学習していた。

5) 他学科との合同研修については6名の学生が肯定的にとらえ、その理由を視野が広がる、語学の心配が減るなどをあげていた。

6) 費用については3名の学生がやや高い。3名の学生は妥当と答えている。妥当と答えた学生は海外旅行の経験のある学生であった。

7) 海外研修参加の動機：研修先であるイギリスへの興味や関心、異文化を体験すること、また医療施設見学や患者と触れ合うことができる研修プログラムだったからなどであった。研修体験が自己の成長につながり今後の看護に役立つからという意見もあった。

8) 研修への期待：現地の人との交流、施設見学による看護の歴史や医療体制を知り、日本との相異点を知る。療養している人と触れ合い、その思いや生活を知りたい。特にホスピスでの体験への期待を記載している者が多かった。（表1参照）

##### 9) 研修施設毎の学びの期待

(1) F.N. について：考え方が施設の看護にどのように浸透しているのか、教育にどのように反映されているのかを知りたいという期待が多かった。中には生活した場所で看護を考えたいという期待もあった。

(2) ホスピス：施設の独自の雰囲気、日本との違いや療養者の生活の質を支えるため工夫、多職種の取り組み、療養者の生活の様子や表情、看護者が関わり時に心がけていること、地域の人との理解と交

流について知りたいなど、緩和ケア実践で体験した学びと比較し、ホスピス発祥の国で学びを深めたいという期待があった。

(3) **Great Ormond Street Children's Hospital**：発達段階を考えたケアや環境、院内での学習や遊び、保護者の支援、看護師教育や専門看護師等の存在、自国以外の患者の診療について知りたいなど、臨地実習体験を踏まえた期待や看護教育や職種について学びたいという期待があった。

(4) **Chelsea Pensioners' Hospital**：施設の利用者や生活状況、一般の老人ホールとの違いや施設は利用者にとってどのような場所かを知りたいという期待があった。

表1. 海外研修参加の動機

N=7

記述内容	カテゴリー	期待
イギリスが好き イギリスの文化を体験したい イギリスに興味	イギリスへの興味	地元の人と交流
異文化に触れる体験海外への興味	異文化体験	現地の人との交流
ナイチンゲールが生活した国 看護の歴史や現状を知る体験 日本との共通点や相異点を学べる 療養している人と関われる	看護や医療に特化したプログラム	看護師の動きや患者の生活学びたい 医療事情：日本との違いや工夫 ホスピス：日本の看護と相異、患者との交流
自己の感性を高める機会 自己の視野や価値観を広げる	自己の成長につながる	体験による自己の感性を期待

(5) その他：飲食物や生活習慣を体験したい、アフタヌーンティーの意味を知りたい、世界遺産を見学したい、英語を話せるようになりたいなど、生活を体験したり、歴史的建造物で文化を体験したい、スピーチ能力を期待する意見などもあった。(表2参照)

## 2. 研修終了後の学び（認識の特徴）

「」学生の実現 太字：研究者が取り出した学生の認識の特徴

1) F.N. について：「自然豊かでひととき大きな墓。家族で一つの墓、F.N.の側面はシンプルで経歴に比べシンプル、人柄をイメージする」等墓石のある地域や特徴に注目する。学習した彼女の業績に比べ墓石の記述がシンプルであることに驚き、心情まで想像する。博物館では、ランプやその他の展示物から「環境整備の大切さ」「看護の基礎」と既習学習を想起し看護の基礎を実感する。これまでのF.N像を想起、見学をして像が変化した「興味なかったが尊敬に変化」「もっと知りたい」と変化した「帰国後調べた。文献に記述されていることが理解しやすい」と学びなおすきっかけになっていた。(表2-1参照)

2) ホスピスについて：カンファランスに参加しメンバーの職種や服装、部屋の雰囲気、カンファランスの内容に注目。「個性性を重視」「家庭的印象」「思いに寄り添う活動」と利用者の立場から、その意味を考える。施設でも家族の部屋、リハビリ室、

表 2-1. F.Nightingale's grave・Nightingale Museum

### 海外研修前の学生の期待と研修後の認識の比較

海外研修前の学生の期待	
出生や生い立ちを知りたい	一般の人へナイチンゲールに対する認知度、その内容
考え方は施設や看護にどのように浸透しているのか。看護教育の場での位置づけ	生活した場所で看護を考えた
い シンプルなお墓をみてみたい	
研究者が取り出した学生の認識の特徴	
<p>〔記述〕</p> <p>墓：父・母・姉と家族で一つのお墓。家族を大切にしていた人。多くの偉業を成し遂げたのに経歴は描かれてない。シンプル。その人柄がすごい。多くを語らないというF.N.の気持ちに触れた。F.N.に少し近づけた。自然豊かな場所に位置。他とは違い大きい。博物館でランプやベッド間の距離をとっている絵や建物の設計図等・・・本に書いてあること見れた。すごい。</p> <p>・F.N.の時代、環境整備見直レクリミア戦争時代の死亡率低下につながった。現在も受け継がれている看護の基礎はF.N.の時代から発信と学び、いまさらながらすごい</p> <p>・博物館で戦争で傷害を負った方に対する看護の資料あり。自分がこの場にいたら何ができるだろう</p> <p>・本で読んだ知識しかなかった。名前の偉大さと環境整備のことくらいしか記憶になかった。</p> <p>・正直、行くまではあまり興味もなくF.N.についても看護覚書を書いた人程度の考え。</p> <p>・尊敬という気持ちに変化。もっとF.N.について知りたいと変化。帰国後少しだけ調べた。自分で見てきたものが書いてあるとイメージもしやすく、とても理解しやすくなった。イギリスに行ってF.N.について触れる体験がで良かった。</p>	
<p>〔認識の特徴〕</p> <p>墓のある地域や大きさに注目・・・自然豊かでひととき大きな墓。家族で一つの墓F.N.の側面はシンプル学習した経歴に比べシンプル、人柄をイメージする。博物館では、ランプやその他の展示物から「環境整備の大切さ」「看護の基礎」と既習学習を想起し実感する。これまでのF.N像を想起、見学をして像が変化した「興味なかったが尊敬に変化」「もっと知りたい」と変化した帰国後調べた。文献に記述されていることが理解しやすい。</p>	



リンパマッサージ室、教会等目的に応じた構造で「デイケアと病棟で看護師は別」と知り「毎回同じメンバーで利用者は安心」「教会は心理的なサポートを重視」と利用者の立場にたって考える。在宅ホスピスが中心であること、自宅で最後をとという患者の思いを大切にと政府も支援していることなどを知り日本との制度の違い、発展ととらえる。「患者と接するときの配慮は？」という学生の問いに対する看護師のこたえから、臨地実習での看護を想起し「患者に対する思いや姿勢は同じ」と実感する。「最期の時が近づくと看護師が在宅に寝泊りをしてケアすること」に注目し、日本と比べて体制が整っていると実感する。久しぶりに看護場面に接し、この体験は「実践では患者の思いを大事にすることとあらためて考えた」と今後につながる貴重なものだととらえていた。問いに対する看護師の答えから「患者に対する思いや姿勢は緩和ケア実習の時の看護師からの学びと一緒に」や「こ

こに来ることが楽しみ」という利用者の反応に注目する。(表 2-2 参照)

3) Great Ormond Street Hospital について：世界的に有名なこども専門の病院であること、NHS 制度や寄付金で運営されていることを知り、文化や制度の大きな違いを知る。NHS 制度について、引率の教員の説明もあり詳細に理解する。その制度については日本と比較し、患者の立場から「安心の反面、病院選択の自由がない。病院に依存するのは？」とメリットデメリットを考える。ステーションの位置やオーバーテーブル設置等ナイチンゲールの遺産ときき、実際に病室を見学「環境調整の大事さは今も昔も変わらない」と考える。年齢別のプレイルームの存在を「患者を大切にしている」と感じたり、教会の存在「精神面への配慮を大切に」「どんな宗教にも対応」から平等を実感したと考える。看護学教育について「大学教育、入学前に専門が決まるシステム」と日本との違いを知る。自己に

表 2-2. Dorothy House Hospice

## 海外研修前の学生の期待と研修後の認識の比較

海外研修前の学生の期待
<ul style="list-style-type: none"> <li>施設の独自の雰囲気、日本との違い</li> <li>療養者の生活の質を支えるための工夫、</li> <li>多職種の取り組み療養者や家族の表情生活の様子や満足度</li> <li>看護師が関わり時に心がけていること</li> <li>施設や病棟の構造の特徴</li> <li>地域の人の理解と交流</li> </ul>
研究者が取り出した学生の認識の特徴
<p>〔記述〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>カンファレンスに看護師、PT、教師、心理士、ボランティアが参加。利用者の状態やサポートについて話し合う→個別性を重視したサポート。思いに寄り添った活動。服装も様々。アットホームな印象。自宅に近い雰囲気。患者さんは安心した気持ちになるだろう</li> <li>看護スタッフ：デイケア・入院施設でチームが異なる。デイケア：週 1 回の利用でメンバーは曜日により固定。毎回同じメンバーで安心感をもって過ごすことができるという配慮。</li> <li>建物：家族の部屋、リハビリ室、リンパマッサージ室など目的に応じた部屋が完備。教会もありチャプレンもおられる。キリスト教だけでなく様々な宗教に対応できるように配慮。→宗教的な意味合いだけでなく、患者や家族の相談などの心理的なサポートにも重きを置いている</li> <li>地域交流：ホスピスについて正しい理解を促していくために交流をはかっている。</li> <li>看護師の思い：「こちらがすべてするのではない、患者の意思を大切にする。そのために時には自分のことをさげすむことも…。患者さんのために何かできる看護師になりたい」といわれた。→患者主体の看護であり、患者さんに対する思いなど患者や家族に対する姿勢は、緩和ケア実習における看護師と一緒に感じた。チーム内の関係がとてもいいといわれたこと印象に残る。</li> <li>患者様：挨拶の中で「ここに来ることが楽しみ」ということばが多くきけた。</li> <li>制度の違い：亡くなる 1 週間前から看護師が患者さんの自宅に泊まりこみ世話をする。→家族の負担が軽減し最期を自宅で過ごせ最期の時間を家族が大切にできるように配慮と感じた。イギリスと日本との違い。最期を自宅で過ごしたいという人も多く政府もそれを支援。小さなホスピスが多くディケア中心。日本は病院の中にあることが多い。イギリスでは自宅での生活や看取りを行う環境が日本より整えられている。</li> </ul> <p>今後につなげたいこと：今まで国試の勉強で病気の理解が中心。あらためて患者さんの気持ちや生・死に対する思い等すべてをそのままとらえ看護することを思い出し、仕事を始める前に感じとることができ貴重な体験になった。患者さんに関わる体験は減多にできるものではない。</p>
<p>〔認識の特徴〕</p> <p>カンファレンスに参加しメンバーの職種や服装、部屋の雰囲気、曜日でデイケアのメンバーが決まっているシステム、内容などに注目。個別性を重視、思いに寄り添う活動、自宅に近い、メンバーが同じなら安心、教会は心理的サポートなど患者の立場から、その意味を考えている。在宅ホスピスが中心であること、それは自宅で最後をとという患者の思いを大切にと政府も支援していることなど、日本との制度の違い、発展ととらえる。「患者と接するときの配慮していることは？」という学生の問いに対する看護師のこたえから、臨地実習での看護を想起し「患者に対する思いは同じ」と実感する。</p> <p>久しぶりに看護場面に接し、この体験は「実践では患者の思いを大事にすることとあらためて考えた」と今後につながる貴重なものだととらえていた。</p>

- 置き換え「どんな患者にも対応できる看護師になりたい」と目指す方向を明確にする。(表 2-3 参照)
- 4) その他：日本にはどこにでもあるコンビニや自動販売機がないことに気づき、**自国の便利さにきづ**

く。English breakfast や Afternoon tea の由来を引率の教員からきき**自然環境の違いから生まれた食習慣であることを知る**。観光では具体的な記載はなかったが、現地での様子から満足していたようで

表 2-3. Great Ormond Street Children's Hospital  
海外研修前の学生の期待と研修後の認識の比較

海外研修前の学生の期待	
・看護の工夫や配慮	・発達段階を考えたケアや環境、院内での学習や遊び、保護者の支援等
・看護師教育について	・看護師免許の取得資格社の有無
	・他職種間の連携徳法
研究者が取り出した学生の認識の特徴	
<p>〔記述〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・先端の治療がなされ、各国から子どもたちが治療に訪れている</li> <li>・施設：設立者(チャールズ・ウェスト)と F.N. が親交、環境を整えること等影響を受けていると知った。病室はベッド間の間隔は十分で、ナースステーションは中心に位置、オーバーテーブル設置→F.N. の遺産、影響力はすごい…今も昔も患者の身の回りに起きていることを的確にアセスメントし、患者に直接的に関わるのと同時に、取り巻く環境に対してのケアを行うことは変わらない</li> <li>・年齢に応じたブレイルーム。子どもたちの生活窥えた→患者中心の看護。教会で考えごとや相談→身体面だけでなく精神面への配慮もある。様々な宗教にも対応できる設備→誰もが平等であると感じた。</li> <li>・看護教育：施設毎の教育から大学教育へ。3 年間。入学時に専門領域を決めて勉学に励むというシステム：日本との違いに驚く→メリット、デメリットある。最初から専門領域を決めることで知識は深められるが、個人的には、どのような患者さんを受け持っても対応できる看護師になりたい。すべての領域を学び、その中で専門領域を決めていきたい。</li> <li>・チャリティ文化：病院が常に工事。進化発展。支えているのが多くの寄付。町を歩いていると、街頭に黄色の帽子をかぶり募金活動している人をよくみかけた。→寄付の文化が根づいていると実感。</li> <li>・NHS(National Health Service)について・財源は税金(18 歳を過ぎたらカードが配布され税金を支払う)病院での支払いはない。初回は地域に設置された一般医(GP:General Practitioner)の診察を受ける。治療困難な場合は医師の紹介により別の施設での診療が可能となることを知った→病院での自己負担額は異なるが、税金から大部分の財源を得ているのは日本と同じ。GP 制度があることでこれまでの自分の健康状態を把握してくれるので安心。その反面、その人自身で病院を選択する自由はない。病気の発見や治療の進みなど医師に依存してしまう可能性もある、患者の満足感も異なるのではないか？</li> </ul>	
<p>〔認識の特徴〕</p> <p>世界的に有名なことも専門の病院であること、それが NHS 制度や寄付金で運営されていることを知り、文化や制度の大きな違いを知る。保険制度については日本と比較し、患者の立場から「安心の反面、病院選択の自由がない。病院に依存するのは？」とメリットデメリットを考える。看護教育制度についても日本と比較し自己に置き換えて考え「どんな患者にも対応できる看護師に」と目指す方向を明確にする。</p> <p>病室やブレイルーム、教会を見学、F.N. の考え「環境調整の大事さ」は今も昔も変わらないと感じる。</p>	

表 2-4. 観光、その他  
海外研修前の学生の期待と研修後の認識の比較

海外研修前の学生の期待	
・生活習慣の体験	・イングリッシュガーデン 歴史的建造物 世界遺産
・英語が少しでも話せるようになりたい	・アフタヌーンティーの意味 現地学生との交流
研究者が取り出した学生の認識の特徴	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・観光もいっぱいできて、すごく楽しいタイミングの卒業良好になった</li> <li>・観光地も巡ることができて、感動も多かった</li> <li>・貴重な体験、よい体験になり楽しかった</li> <li>・社会人になってからもまたイギリスに行きたい</li> <li>・新しい知識を得て、体験で自身の学びも深まった。</li> <li>・昼食を食べない 朝食の量がとても多い 必ず大きなベーコンが入っていた</li> <li>・コンビニや自動販売機、24 時間営業の店：日本は便利で快適な暮らしがありがたい</li> <li>・普通に生活できることに感謝したい</li> <li>・もう少し英語が話せるようになりたい</li> </ul>	
<p>〔認識の特徴〕</p> <p>日本にはどこにでもあるコンビニや自動販売機がないことに気づき、自国の便利さにきづく。English breakfast や Afternoon tea の由来を引率の教員からきき、自然環境の違いから、生まれた食習慣であることを知る。観光では具体的な記載はなかったが、楽しかったという表現をしていることから満足していたようである。他学科の学生との交流についても楽しめていた。卒業旅行ととらえていたが、観光だけでなく施設の見学、病院訪問等を貴重な体験と位置づけており、再び訪れたいという学生もいた</p>	



ある。他学科の学生との交流についても楽しめていた。卒業旅行ととらえていたが、観光だけでなく施設の見学、病院訪問等を**貴重な体験と位置づけており、再び訪れたいという学生もいた。**(表2-4参照)

### 考 察

主な研修について、研修前の学生の期待と研修後のレポートから抽出した学生の認識の特徴を比較検討し、今回の海外研修の意義と課題を明らかにする。

「」：学生の表現    太字：認識の特徴

1. F.N.について：研修前は「出生や生い立ち、現地での知名度や考え方がどのように現場に浸透しているのか」といった事前に確認できることの他学習したF.N.の看護は発祥の地で、どうなのか？という関心にすぎないと推測された。それはF.N.について「看護覚書を書いた人」「本で読んだ知識だけ」「名前の偉大さと環境整備のこつくらいしか記憶になく」「正直、行くまではあまり興味もなく」と記述していることからわかる。しかし研修後**墓石のある地域や特徴に注目する。学習した彼女の業績に比べ墓石の記述がシンプルであることに驚き、心情まで想像する。**つまり実在した人で、この地で生活をしていた人と実感し、その人柄までイメージが広がっている。また**博物館のランプやその他の展示物から「環境整備の大切さ」「看護の基礎」と既習学習を想起し看護の基礎を実感する。**この地の冷たい風や湿気を帯びた空気、太陽の光の鈍さが、より印象強くしたと考えられる。「興味なかったが尊敬に変化」「もっと知りたいと変化し帰国後調べた。文献に記述されていることが理解しやすい」とF.N.に対する像が大きく変化している。研修前の期待であった「現地での知名度や考え方」については、多くの人とは接することはできなかったが、博物館見学や小児病院でも説明されたナースからF.N.の名前がでてきたこと、病棟を見学し「環境」についてきづいたことで、多少は理解することができたのではないかと考える。以上のようにF.N.にたいする学生の認識は、研修前と研修後で大きく変化している。これは入学当初の学習が、彼女の著書である「看護覚え書き」を読み、その意味を理解するというものであるが、それは体験を伴わない概念的な理解だと考える。三浦は「概念は、個々の事物のもっている共通した側面すなわち普遍性の反映として成立する。…事物の特殊性についての認識はすべて超越され排除されてしまっている」と述べている。<sup>5)</sup> 個々の事物の共通性や特殊性を理解して、認識されるので

あれば概念の理解は容易であろうとおもうが、入学当初は、これから看護のさまざまな考え方や理論について学習しようという段階である。今回の研修で大きく変化したのは、4年間の学び、臨地実習体験やこれまでの学習で蓄積されたものが統合されF.N.に対するイメージの変化、看護における「環境」の重要性という深まりにつながったと考える。つまりF.N.への概念的な認識から、研修を通して現象的、さらに学習したことの意味を理解するという表象的な認識となり関心が増したと考えられる。

2. ホスピスや小児病院について：ホスピスについて研修前の期待は「施設の独自の雰囲気、日本との違い、療養者の生活の質を支えるための工夫、多職種の取り組み療養者や家族の表情生活の様子や満足度、看護者が関わり時に心がけていること、施設や病棟の構造の特徴、地域の人の理解と交流等」ととても詳細に期待を上げている。これは本学科には緩和ケア学:S2単位と緩和ケア実践:P1単位の2科目を配置している。研修参加の学生は全員、緩和ケア実践を終了しており、そこでの体験や学びが、その期待の多さに頷いているものとおもわれる。研修後の学びも、表4にあるように、**カンファランスの内容やメンバーの職種や服装、部屋の雰囲気に注目し「個別性を重視」「家庭的印象」「思いに寄り添う活動」と利用者の立場から、その意味を考える。**「こちらがすべてするのではない。患者の意思を大切に・・・患者さんのために何かできる看護師になりたい」という看護師の患者に対する思いの深さに触れ、臨地実習での看護を想起し「患者に対する思いや姿勢は同じ」と実感する。この体験は「実践では患者の思いを大事にすることをあらためて考えた」と今後につながる**貴重なもの**だととらえていた。終末期における在宅でのケアという日本との違いを知り利用者の立場に立ちイギリスは発展をとらえる。小児病院について研修前は「看護の工夫や配慮」「発達段階を考えたケアや環境」「院内での学習や遊び」といった小児看護に関する関心や「看護師教育について」「看護師免許以外の取得資格者の有無」など看護職に関する興味であった、NHS制度や寄付金による運営を知り、文化や制度の大きな違いを知る。制度について日本と比較し、患者の立場から「安心の反面、病院選択の自由がない。病院に依存するのでは？」とメリットデメリットを考える。看護教育制度についても日本と比較し自己に置き換えて考え「どんな患者にも対応できる看護師に」と目指す方向を明確にする。

以上の2施設の研修における学生の認識の特徴を概観すると、共通していることはいずれも施設の構造や特徴、カンファランス、在宅ケアを中心としたホスピス、医療保険制度を常に、これらは**患者や利用者にとって、このことはどのような意義があるのか、どのような意味があるのかをとらえようとしていることである**。これは4年間をとおして「患者中心の看護」が学生の中に根づいていることをうかがわせるものである。【実践では患者の思いを大事にすることとあらためて考えた】と**自己の看護観を再認識する体験**にもなっていると考える。また**医療保険制度や看護師教育制度、寄付の文化**などから、日本の制度と比較しどのような違いがあるのかを、**患者の立場、学生の立場から考えるという思考が見られ**、これは国際的視野の広がりと考えられる。

以上をまとめると海外研修の意義として次のことがあげられた。第1に看護の先駆者であるF.N.に対する認識が概念的なものから研修を通して存在を実感する現象的な認識、学んだことの意味を理解する表象的な認識へと変化している。第2に医療施設の見学やカンファランス参加で感情が揺さぶられながらも4年間の大学生活の中で培われた個々の看護観がより確固たるものになっていると考えられる。このように看護に対する考え方が海外研修を通して変化するという報告は他大学にもある。例えばアメリカで医療施設を見学して「1. アメリカの看護婦のプロ意識・地位の高さに触発され学生の内面のゆさぶり。2. 看護の可能性に気づき価値観が高まる」<sup>6)</sup>等の情緒的な変化があった。この研究は2年生76名が参加しており単純な比較はすべきでないが、本学の場合4年次卒業時期であったことから、感情が揺さぶられながらも自己の看護観の明確化につながっていると考えられる。目指す方向が明確になっていることは卒業後の学びを期待させるものであり、これは生涯学習につながると期待したい。第3に日本と異なる医療保険制度やホスピスのあり方について違いを知り看護の対象にとっての意味を考え、自己の考え方を確認している。前述の研究<sup>6)</sup>でも「視野の広がり、日本の現状を見つめなおし問題意識の芽生え」があげられていたが、本研究では自己の考え方を確認しているという点で特徴があった。これを保健医療に関して国際的視野の広がりにとらえた。第4に看護の本質である「患者中心の看護」という考え方が学生の中に根づいていることを確認できた。これも前述の研究<sup>6)</sup>でも「看護の本質について考え直す機会」となったとあり共通していた。特に

本研究の場合具体的な表現であり。卒業後の看護実践を期待させるものである。第5に多くの観光地、特に世界遺産や多くの博物館や美術館をまわったことで、歴史や文化的価値、文化の豊かさ、寄付文化など異文化理解という点では意義があったと考える。引率教員の説明などもあり、食事内容や独特の食文化なども知ることができた。海外研修に対する「観光」についての考え方で先行研究を調べた。アメリカのニューヨーク州立大学での研修報告(1, 2年生10名参加)に「印象に残ったこと:観光:8名, キャンパスライフ:7名, 自由旅行:6名, 医療関係施設:2名(複数回答)」<sup>7)</sup>という結果があった。その中で『プログラムの中核をなす「医療施設の見学」「小学校訪問」といった研修プログラムの中核を成す要素はいずれも低かった』<sup>7)</sup>と解釈されていた。本学の事前のアンケートや研修後の学びから海外研修プログラムに観光は欠かせないものと考えたが、遊びの要素も入れながら、異文化理解という視点で内容を検討することも大切であることを示唆するものである。

次に課題として、第1に4年次の卒業時期の研修旅行であったために、その成果は卒業後の学生の職業生活にはいかされると推測できるが、推測でしかない。前述の研究でも「向上心、向学心が生まれる」とあるが成果を在学中の自己の学習に反映したり、後輩へつなげたりすることができない。大学教育に反映されるように、4年次以外の時期の検討や複数学年にまたがる研修も検討してよいのではないかと考える。第2に現地の人との交流、大学での講義や実習への参加がなかった。そのために、会話に対するストレスの記載はなかったが「もう少し英語が話せるようになりたい」という意見もあり、交流する研修を設ける必要があると考える。特に看護の対象者は「生活をしているその人」であり、様々な地域や文化の中で生活をしている人を理解するためには、現地の人との交流で生活を知ることは欠かせないと考えられる。

#### おわりに

引率教員の責任として、学生の研修前後のレポートから期待と結果を比較し、その意義を明らかにしたいと考え研究に取り組んだ。現地では、もちろん学生の生の声を聴き、内容は概ね期待通りであったが、学生のレポートを精読するうちに、学びの大きさや認識が変化したことが伝わり、さらに意義を実感するものとなった。これらは、いずれも研修前に学生の意識を知るためのアンケート調査をしたこと、その結果に即した研修内容を実現させたいと学科を

越えて担当教員が詳細な打合せをしたこと、それに  
応えようと現地の施設と詳細に交渉をしてくださっ  
たことばと文化学科の先生方が努力してくださった  
こと等多くの要因で得られたものとする。この海外  
研修の実現に力をいただいた先生方、学生に感謝  
をしたい。カリキュラムに掲げられている「国際社  
会において、広い視野に基づき看護師として諸外国  
との協力を考える内容とする」「国際化及び情報化へ  
対応しうる能力を養えるような内容を含むものとし  
る」にはまだまだ不十分ではあるが、広い視野に基  
づき医療や看護を考える素地は養えたように感じて  
いる。

#### 引用文献

- 1) 厚生省健康政策局看護課編：看護教育カリキュラ  
ム，第一法規，1998.
- 2) 看護師等養成所の運営に関する指導要領（別表 3）：  
看護六法（平成 21 年度版），新日本法規．
- 3) 第 2 回大学生の学習・生活実態調査報告書：ベネッ  
セ教育総合研究所 2012 年．
- 4) 海保静子：育児の認識学 P267，現代社，2000.
- 5) 三浦つとむ：認識と言語の理論第 1 部 P91，勁草書  
房，2002.
- 6) 峰村淳子，井澤和代：東京医科大学看護専門学校  
紀要，第 10 巻，第 1 号 2000 年 2 月．
- 7) 片岡由美子：愛知県立看護大学紀要，VOL.12，59-  
66，2006.